



みんなで考えよう。  
人が人らしく生きるために…



## 養老町人権教育研修会

### ～木村 泰子さんの講演より～

実に4年ぶりに、町民会館にて養老町人権教育研修会を開催しました。講師には、大阪市立大空小学校初代校長を務められた木村泰子さんをお招きし、「すべての子どもの学習権を保障する」という理念のもとに行われた、子どもたちとの日々の関わりや地域の皆さまを巻き込んだ学校づくりなど、具体的な実践をもとにお話しいただきました。木村さんのお話は、「二人ひとりを大切にするとどうということなのか」ということを改めて私たちに問いかけていただいたと感じています。今回は、その講演の一部にはなりませんが、研修会に参加していただいた皆さまの感想とともにご紹介いたします。

#### その言葉の背景にあるもの

木村さんは、ある男子児童に焦点をあて、その児童の成長を軸に、たくさんのことを話してくださいました。その中でも、木村さんのあたたかい男子児童への眼差し、深い理解が垣間見えたエピソードがありました。お話は以下の通りです。  
ある日、男子児童は、友達関係のトラブルで、先生た

ちの話も受け入れられない状態でした。それでも木村さんは、粘り強く話しかけ続けられました。しかし、男子児童からやっと出てきた言葉は、「死ね」という心の叫び声でした。それを聞いた木村さんは、その場からさっと引き下がります。それを見て、他の教職員がすっと入れ替わり、その児童に話しかけ始めました。

木村さんは、講演でこの出来事について、このように語られました。「みなさん、学校でね、このような言葉が飛び交うのには驚かれたかもしれないませんが、○○さんのこの言葉には、『今はもう校長先生の顔は見たくない、あっち行って！』という思いが込められているんですよ。だからね、私ね、隣の部屋に行っただけです。」そして、木村さんは、なぜ男子児童がそうなってしまったのか、男子児童のこれまでの人間関係や様々な背景と合わせて詳しく話してくださいました。

行動や言葉の裏にある思いを感じ取ることで、その背景を理解することというのは、人権を大切にすることにもつながります。木村さんは、まさにそれを実践し、

子どもたち一人ひとりに寄り添い続けられました。言葉ではどれだけ分かっていても、つもりでも、木村さんのように行動にまで結び付けるのは、誰にとっても難しいことです。相手を大切にすることか、そして、理解の先にある行動の大切さを、改めて考えさせられるエピソードでした。

#### 講演の終わりに

木村さんは、講演の終わりにおける言葉を私たちに伝えてくださいました。それは、差別と闘ってきたあるリーダーが木村さんに託された言葉でした。

「人は暗いところに行ったら、明るいところはよく見えるやろ。でも、明るいところにいたら、暗いところは探さへんかったら見えへん。いつも『暗いところはどこや？』って探す大人になつてな。」

この言葉を、木村さんはずっと大切にされてきたそうです。人は、相手のことを考えているつもりでも、どうしても疎かになってしまふことがあります。そしてそれは、自分に関わることでが上手くいつているときには尚更です。意識しなければ見えないものを見ようとする心、それこそが大切なのだと思えて実感しました。

#### 参加者の感想

- ・自分を見つめ直す機会を与えていただきました。少しでも自分自身を変えることができると、考えながら人と接していきたいと思えます。
- ・学校のあり方はもちろん、地域のあり方についても自分事としてとらえ、どう行動するのか考えていくことが大切であると思いました。
- ・大人の考え方が子どもの考え方を形づくり、未来を変えていくという言葉、ずっと忘れません。
- ・「子どもは地域の宝」「一人の子どもに寄り添う」「心がうかがあたりまえ」、心に残る言葉がたくさんありました。目の前の子どもに寄り添う大人になりたいと思いました。